
天上への10日

ヨーキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天上への10日

【著者名】

コーキ

N5866B

【あらすじ】

ある日、足を踏み入れたダイニングキッチンは白く雲がかかっていて、自分は解脱し天界に上ったのだと思ったのもつかの間、雲間から地獄の餓鬼が白目を観て顔を出し、私をねじ曲げてしまったのである。

(前書き)

一気に書いてほとんど推敲校正しておつまませんので読みづらい部分
はあるつかと思います。
が、フリージャズを聞く気持ちでお読みください。

ダイニングキッチンに足を踏み入れた瞬間に私は自分がどうとう生きながらにして天界に辿り着いた、すなわち私は生きながら死んだすなわち私は解脱した、と感じて無量の感動に包まれた。そこは雲の上であった。一寸先も見えない。ただ白く、白い無限。その無限の足下、雲がもうもうと漂う中からいきなり餓鬼が面を出して私は驚き、飛びすさった。餓鬼？この場所はもしかして天界ではなくて地獄？

それにも粉っぽい雲である。ゲホゲホと私がむせると雲が散つて、そこ、私の足下には真っ白な顔をした餓鬼が面向を上に向けて正座している。白目を剥いて。

徐々に雲が払われて行くと、餓鬼の面前には朱色円形の卓袱台が設えてあって、その風景は間違いない。いつもの我が家ダイニングキッチンに相違ない。

卓袱台の上には大きめのハナクソが5・6粒くつついでいるし、よくよく観察してみると餓鬼はどうも長女であるらしく、それはそれで問題はないのだけれど、ただ何故に長女がこのように白化した室内で白目を剥いて失心しているのかが理解できなくて私は、しばしその場に立ちつくし、黙考した。

『はは～ん』

と、私の脳は納得したような声をまず上げてから、

『さてはこの長女のヤツは、このダイニングキッチンのテレビでもつて実にもならない腐れ番組でも鑑賞しながらだらしなくハナクソをほじくつていたところが迂闊にも指を奥にまでつっこみすぎて脳まで掘りぬいてしまい、そうなるとさすがに、脳はショックを受けてこいつを失心させたのである。この白い粉はその際にこいつのつむじあたりからでも噴出した混沌の残骸だと推測できる。や

れやれ、どこかで聞いたような話だが・・・。』

と結論付けた。

「バカボンのパパか、おまえは『

私はそういう残して踵を返し、キツチンの引き戸をぴしゃりと閉めてその場から立ち去りつつ、

「解脱への道はまだ遠いか?』

と、声に出して自問し、少しうなだれた。

その晩は何故か激しく欲情、7年2ヶ月ぶりに妻とセックスをして中出しし、その後尿意をもよおしたのだがなんだか面倒臭くて朝まで我慢するつもりだったのが結局我慢しきれず、夜中の4時頃にそのまま放尿と言つか失禁粗相をしてしまい、寝小便をした後ろめたさと下半身の不愉快さと悪臭から逃避するために眠りについて気がつくと妻はいなかつた。

「あ」

首を振り振り上半身を起こすと私の腹には口紅で描いたと思わしきピンク色の文字でただ、

【死ねば戻る】

と、ひとことあつた。

私は頸の後ろをぱりぱりと搔きながら立ち上がり、失った水分を補給しようとダイニングキッチンへ向かつた。

昨日とほぼ同様の風景があつた。

ハナクソの二じりつく朱色円形の卓袱台前には白目を剥いて放心する長女が餓鬼のようにいて、周囲には相変わらず粉っぽいカオスが漂つている。

ただ、昨日と比してハナクソがやや大きく肉厚になり、カオスの透明度が増しているように感じられた。

私はふうふうと息を吹き出して周囲の混沌粉を払い流しに辿り着き、混沌粉の積もった食器のなかから混沌粉で曇ったグラスを引き抜いて水を注ぎ、苦ぼつたい水を立て続けに9杯飲み干した。

水分が過剰になつた私は息が切れ、全身から尿臭の汗を吹き出し
ながらヨロヨロと寝室に戻り、まだぐぢやぐぢやに湿つて不愉快極
まりない布団に横たわつて眠つた。

その日、妻は戻らず、私は空腹に耐えかねて部屋の土壁を叩き割
つてそれを喰つた。

「ぎよめ」

私は思わず妻の名を呼び、

「腹が減つたよ」

と、泣いた。

妻の高笑いが聞こえたようで空しく、

「壁は堅くて美味しくないんだ」

と嘆く自分の声はさらに空々しいようで不愉快のあまり血圧が上昇
したのか、吐き気がして止めることもできずに嘔吐し、その夜はそ
のまま倒してしまつた。

翌日も同様の生活であった。

翌日も同様であった。

翌日も同様であった。

その間、卓袱台の上に張り付けられた長女のハナクソはふつくら
と大きく成長し、私の身辺身成りの不潔さは加速していった。

妻が失踪してから9日が経過した朝、寝室の壁をほぼ食いつくし
てしまつた私は餌を求めて隣室に進入し、へそを出してぐうぐう寝
ている長男を発見してその顔色が妙に健康的なことと、風呂上がり
のようないい匂いが部屋中に漂つてることに腹を立て、腹いせに

幸福絶頂のようなその顔面に脱糞しながら思った。

「風呂に入る？」

生命が宿る。歓喜。喚起。まったく爽快。しあわせ。溌剌。絶頂。親和。慈しみ。愛。

とにかく肯定的なコトバしか浮かんでこなくなつた私は、あまりにはしゃぎすぎて狭い風呂場の中、壁に飛び蹴りを喰らわせて破壊し、全裸のまま浴室を飛び出すとスキップを踏みながら廊下の壁にも飛び蹴りを入れただが、なんといっても安普請の家である。壁はいとも簡単に崩壊して私の体は外界に放り出された。外界とは言つても自分の家の敷地内である。ちいさなちいさな土の庭を「ひろ」ごると全身をすりむきながら転がり、往来と我が敷地を隔てる堀に激突して止まつた。

私はそのまま仰向けになつて笑つた。

快晴である。

土に寝ころび、雲一つない青空を仰ぎ、快活に笑う。先ほどまで壁を喰い怨嗟にとらわれて長男の顔面に糞を垂れていたのが自分であるとは信じられない気分である。

ひとしきりうれし涙に噎んでから身を起こし、先ほど突き破つた壁の瓦礫を手で除け、足で払つて家内に戻ると、なにやら甘い匂いがする。

ネズミの糞のような二オイの土壁だけを食べ続けていた身には辛いほど魅惑的な香りであった。

私はくんくんと鼻を鳴らしながら二オイを追つて行く。

辿り着いたのはダイニングキッチンであった。

せつかく快活な中年に戻つて蘇つたというのに、またあの白い混沌を吸い込んだら元の汚物に逆戻りかもしれない。だが、この甘い匂いには逆らえそうないと意を決した私はおずおずと引き戸を引いた。

天上界でもこれほど華やかではなかろう。

ダイニングキッチンの中央、朱色円形の卓袱台には純白レース編みのクロスが整えられていてまたそのど真ん中には大皿に盛られたクッキーの山、山、山であつた。

長女は真っ白に粉をかぶりつつもまだキッチンに立ち、さらにクッキーを焼き続けている。

長男は無心に満面の笑みで、顔面に糞をつけたままそれに気付いていないかのように長女の焼いたクッキーをむさぼり食っている。

私はおそるおそる山盛りの皿に手を伸ばし、大振りなクッキーを選んで口に運んだ。

堅くなく、柔らかすぎず、甘すぎず、なめらかでだがしつかりとした味がついていて・・・私は泣いた。

私と長男は競うように喰い続けた。

長女の声が、

「ママは?」

と、私に問うていてるのはわかつっていたが、無視した。

長女の声が

「今日はママの誕生日でしょ?」

と、私に教えているのはわかつっていたが、無視した。

餓鬼は天上で生命の種を創作し、つむじから放たれた白い混沌とハナクソが結んだ実は狂氣を封じ錯乱を癒し、生命を支えてくれる。探しても無駄、辿り着こうとしても無駄、それはいつでもそこにあり、どこにもいかない。

涙と涎を垂れ流し、ただ一心不乱に喰えればいい。

一心不乱にわき目もふらず喰い続けねばいい。

長女は焼き続けるだろう。

きっと来年か、再来年か、妻の戻る「」の田まで。
私と長男は喰い続けるのだ。

きっと来年か、再来年か、妻の戻る「」の田まで。

真実の幸せ。

そのサイクルがどこにあるのか。

わかる瞬間が必ず来る。

どこにも行く必要はなく、探す必要もなく、ただこの場所にいる
ことで。

(ア)

(後書き)

インプロビゼイション。

音楽でも文章でも、ある意味私にとってこれが創作、表現のテーマ
かもしれません。

私の脳にはノイズが心地よいのです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5866b/>

天上への10日

2010年10月12日07時05分発行